マイウェイ my way

伊藤製作所社長

伊藤　澄夫　5

海外へのあこがれ

1950年代に入り、私の遊びのエリアは次第に拡大し、東洋紡績など大きな工場の焼け跡探検や、野原、小川が遊びのフィールドとなった。マッチとしょうゆを持っていき、捕れた魚やエビ、カニをその場で焼いて空腹を満たすなど、のどかな時代だった。

新聞がまだ読めないため、夕方からラジオを聞くことが楽しみだった。当時、朝鮮戦争の経過やトラック、ジープの修理をアメリカ軍から大量に受注した、といったニュースが流れていたのを覚えている。自衛隊の発足、スエズ危機、ワルシャワ条約などの言葉を何度も耳にしたが、全く意味が分からなかった。ただ、このような情報はNHKが海外の放送局から得た情報なのか、現地に駐在して得たものなのかが気になった。

音楽ではフランク・シナトラやレイ・チャールズなどの曲を、歌詞の意味が理解できないにもかかわらず口ずさむことができるほど、何回も聴いた。

そのころ高級車をよく見かけた。それらは全てアメリカの大型乗用車であり、子どもながらに、すごい技術を持ったアメリカという国にひきつけられた。海外事情に人一倍興味を持つ子どもだった。

11年後にドロシー（左から２人目）とナイアガラで対面

ペンパルに宛てた手紙

海外を知るためには英語が必要だと分かってはいたが、当時、英語と言えば『Jack And Betty』という教科書くらいしかなかった。そこで海外事情を知る手だてを文通に求めることにした。欧米のたまたま少女ばかり7人の「ペンパル」と手紙を交換することになった。彼女たちの住所は文通の本に紹介されていた。

中学3年生の英語力では無茶な行為だったかもしれないが、ペンパルに初めて書いた手紙に、「日本には英語の雑誌や新聞がない。古いものでもよいので送ってほしい」と書いたところ、米オレゴン州のドロシーと豪シドニーのジェーンから、大量にそれらが送られてきた。1ページの単語を調べるため、1時間以上かけて辞典を引いた。

お年玉で買った小田実の著書『何でも見てやろう』を何回も繰り返して読み、大きな影響を受けた。ただ文通するだけではなく、どこの国でもいいから行ってみたい、という抑えられない感情が芽生えたのもそのころだった。

海外事情に興味を持ち続けたことが、現在、海外事業を展開する上での礎となったのは間違いないだろう。